紀伊半島大水害
激流百m流された女性ここに引っかかり一命を留む
2011年9月4日午前3時頃

私の住む地域は紀伊山地の霊場と参詣道、世界遺産に登録された落差日本一の那智の滝、熊野古道大門坂、大門坂駐車場のとなりに和歌山県土砂災害啓発センターがあります。夏は那智海水浴場花火大会があり、空青し、山青し、海青しの自然豊かなすばらしい地域です。

私の家は那智駅から約2キロ、車で5～6分の所にありました。井関駐在所の真裏で150センチ低い平屋の一軒家に三人家族で住んでいました。井関で暮らして40年余りになります。

2011年9月4日大型台風12号は動きは遅く、記録的な大雨をもたらし、穏やかな那智川は乱れ狂う激流となってしまったのです。

大型台風１２号接近の
ニュースに服を着たまま寝床
でテレビを見ていました。午
前２時過ぎ、突然町内放送が
流れましたが、ハッキリ聞こ
えなかったので役場に電話し
ました。
「今の放送は何ですか？」
「避難指示が出ました。井関
保育所から市野々小学校へ
避難して下さいという放送で
す。」
「避難勧告と避難指示、どち
らが重いんですか？」
「避難指示です。」
「那智川の水位は県道のどこ
らまで来ているんですか？」
「あのー　係の者がいないの
でわからないです。」という
返事でした。

私は一人で県道そばの那智川を見に行きました。

自宅から三軒隣りの視覚障碍者の楠本益美さんの横にパトカーを停めたおまわりさんは通行止めの警備をされていました。

おまわりさんに「避難している井関保育所の人は市野々小学校へ行きましたか？」

「行きましたよ。」という返事。

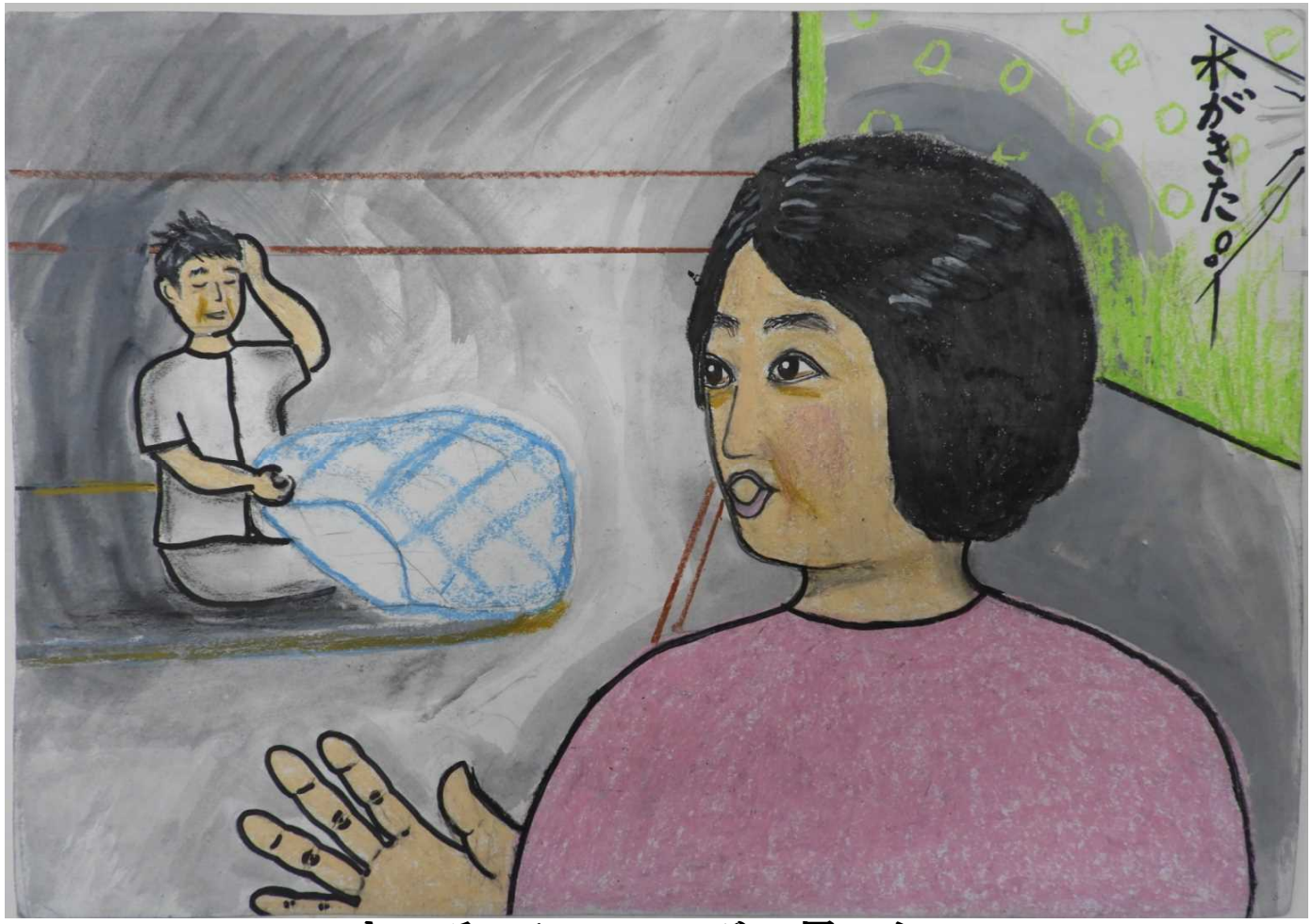
井関区の役員も川を見に来ており、堤防を見ると５ｃｍ位の水が越えてきており、田んぼの半分まで来ていました。５ｃｍとはいえ堤防を越えているのは大変な事です。私は一人暮らしの８０才の岩本悦子さんに伝えようと家の方に小走りで行きました。

その途中、目の不自由な楠本益美さんは、台風になるといつもお姉さんの所に避難するので今回もそうだろうと声をかけずに岩本宅に向いました。

この思い込みが一生の後悔となりました。（家に居たのです。）その日の午前中、自宅近くで発見されました。

岩本さんの家は全部の部屋に明かりがついて、すぐ出てきてくれました。放送内容を伝え、「避難する？」と聞くと、「避難しない。」という返事でした。数分後、大洪水が来ることなど夢にも思っていませんでした。

「お互い気をつけようね。」と私はすぐに家に戻りました。これが最後の対話となったのです。数分後、大洪水が岩本さんと家もろとも流されるとは夢にも思っていませんでした。



家に戻るとすぐ娘と夫を起こしました。その時です。娘の部屋から「水が来たぁー！」と叫び声があがりました。

私は「大事な物はベッドの上に置いて！」と言ったものの、それはあっという間に床上まできました。

「早く！早くきて！」
奥の間にある貴重品をたのんだ夫はなかなかきません。
娘は横のマドから出てトユにぶら下がっているのも心配です。
必死で叫び続け、やっと目の前にきて貴重品を受け取った時には、水は胸まで来ていました。
東北大震災のテレビで見た激流がよぎりました。突然パトカーのサイレンがけたたましく鳴りひびきました。

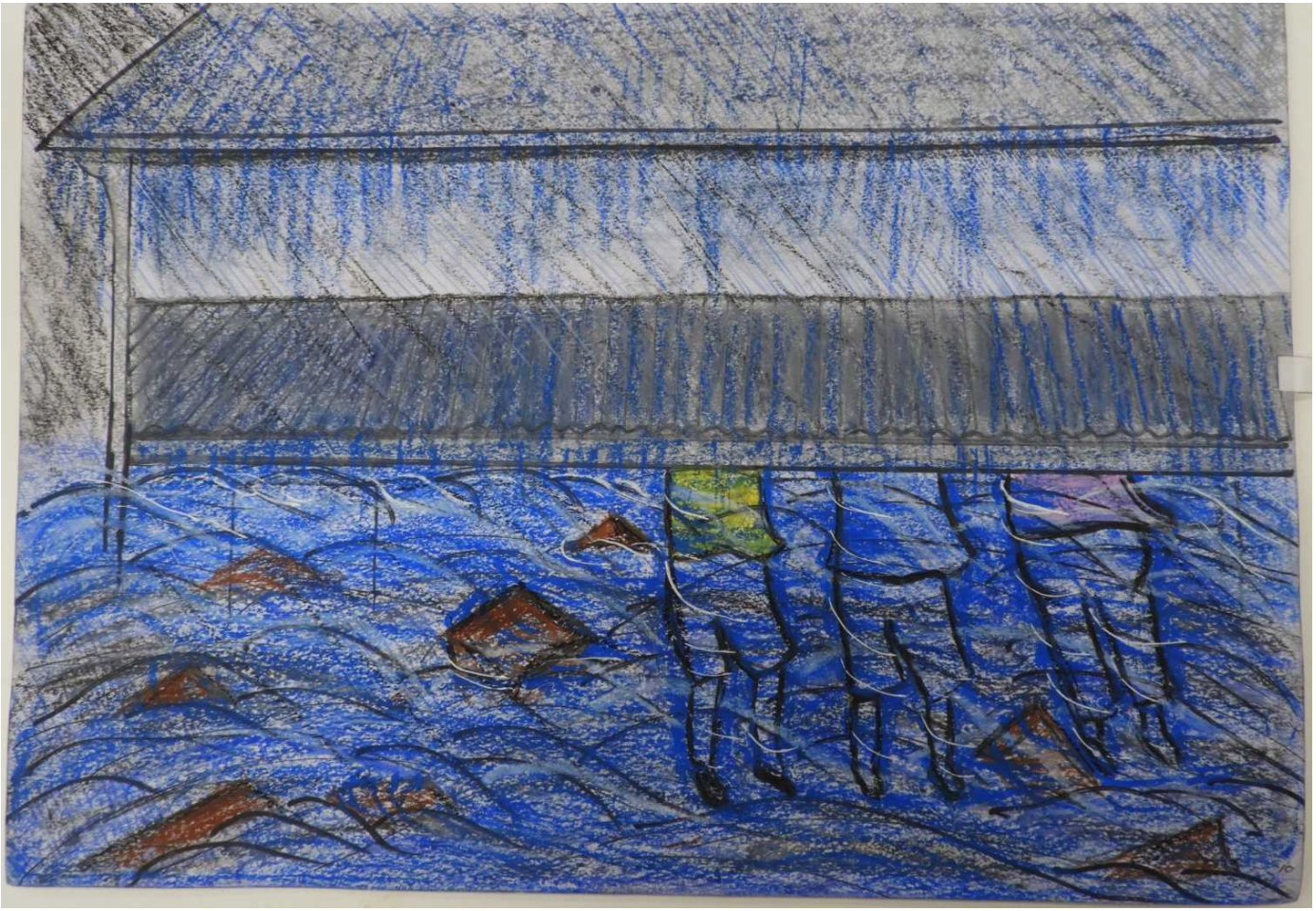
玄関の戸が開かない。横の窓から出た3人は波板のトユにぶら下がりました。

玄関前は激流の川になっています。水が上がるばかりで足が着きません。トユをけんすいするように波板の奥に移動しました。

その直後、娘の身に大変な事が起きていたことなど自分の事で精いっぱいで夫婦共気がつきませんでした。

娘はトユを移動するとき手をすべらし、激流に落ち込み、その上物干し台のさおをかけるフックの所に服が引っ掛かり、水面に出ることが出来ず、苦しんでいたのです。

娘はいったん潜ぐり、服を外し、水面に出て息ができたのです。何事もなかったようにお父さんの横にぶら下がったのです。



軒下は物置のように色んな物を置いていたのでそこに足をのせ、３人はぶら下がっていました。

激流は磁石のように一つ一つの物を吸い込み、足元には何もなくなり、１０本の指に全体重がかかる状態になりました。水位はあがるばかり。屋根に上れる方法はありません。木箱のような物、いろんなものが流れて、あたり一面激流の中。

「助けて！」と叫んでも、誰も来られない状況。「早めに避難すればよかった。」と後悔してももう遅いのです。乱れ狂う水面ばかりを見ていました。

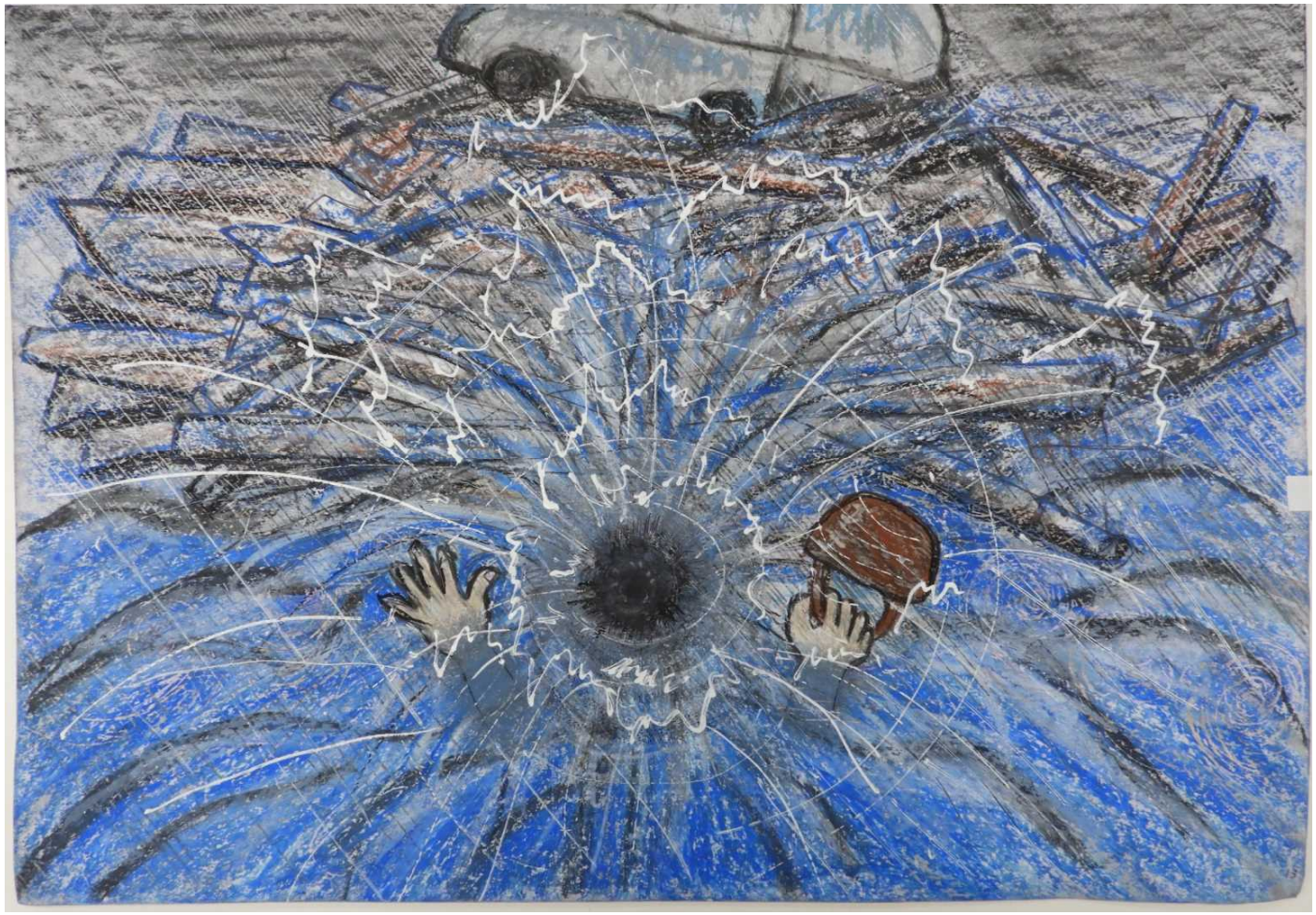
どうすれば助かるのか途方にくれました。

“イチかバチか、激流３メートル先の井関駐在所のフェンスを登り、２階に行かせてもらうしかない。”と判断しました。

意を決し、「私先に行くよ！」とぶら下がっているところから飛び込みました。トユを潜り、頭を出した途端、一気に激流に流されました。たった３メートル先に行けなかったのです。

「浮き輪がわりになるよ」
と私の身を案じて娘が持たせてくれた物を、抱きかかえていましたが右に左に激しくゆさぶられ、手を離してしまいました。

玄関から左側6メートル先の狭い路地には材木やガレキ、一番上に私の車が乗っかっています。



あっという間に足からガレキの中に吸い込まれていきました。

せまいガレキの中、両手で木をつかみ、元の入り口に戻ろうとしましたができません。

ちょうど筒に入れた紙鉄砲の玉が飛び出るようにガレキの中を流され、薄ボンヤリした半透明の激流の中を三菱マテリアル事務所前を流されているのがわかりました。

もがいても、もがいても水面には出られません。生きるか死ぬかの葛藤です。

「死にたくない。」

「絶対死にたくない。」

「水の中で息をしたら死ぬ。」

「気絶しても絶対息をするもんか。」

助かることへの執念の戦いです。

私は苦しまぎれに「ウーン」と肺を広げ、押しこむように息みました。「おしっこ」をチビルぐらい息みました。

すると胸から何か下がっていくような感じがしました。苦しさが楽になったのです。

でもまた苦しくなるかわかりません。水面を目指してもがき続けました。

突然体が水面に浮き、
ハァーハァーとふた呼吸できました。
でもすぐ足から沈んでいきます。

私はとっさに水面に浮いている小枝をつかみました。

ことわざに「おぼれる者ワラをもつかむ」とあるように、所詮は小枝です。

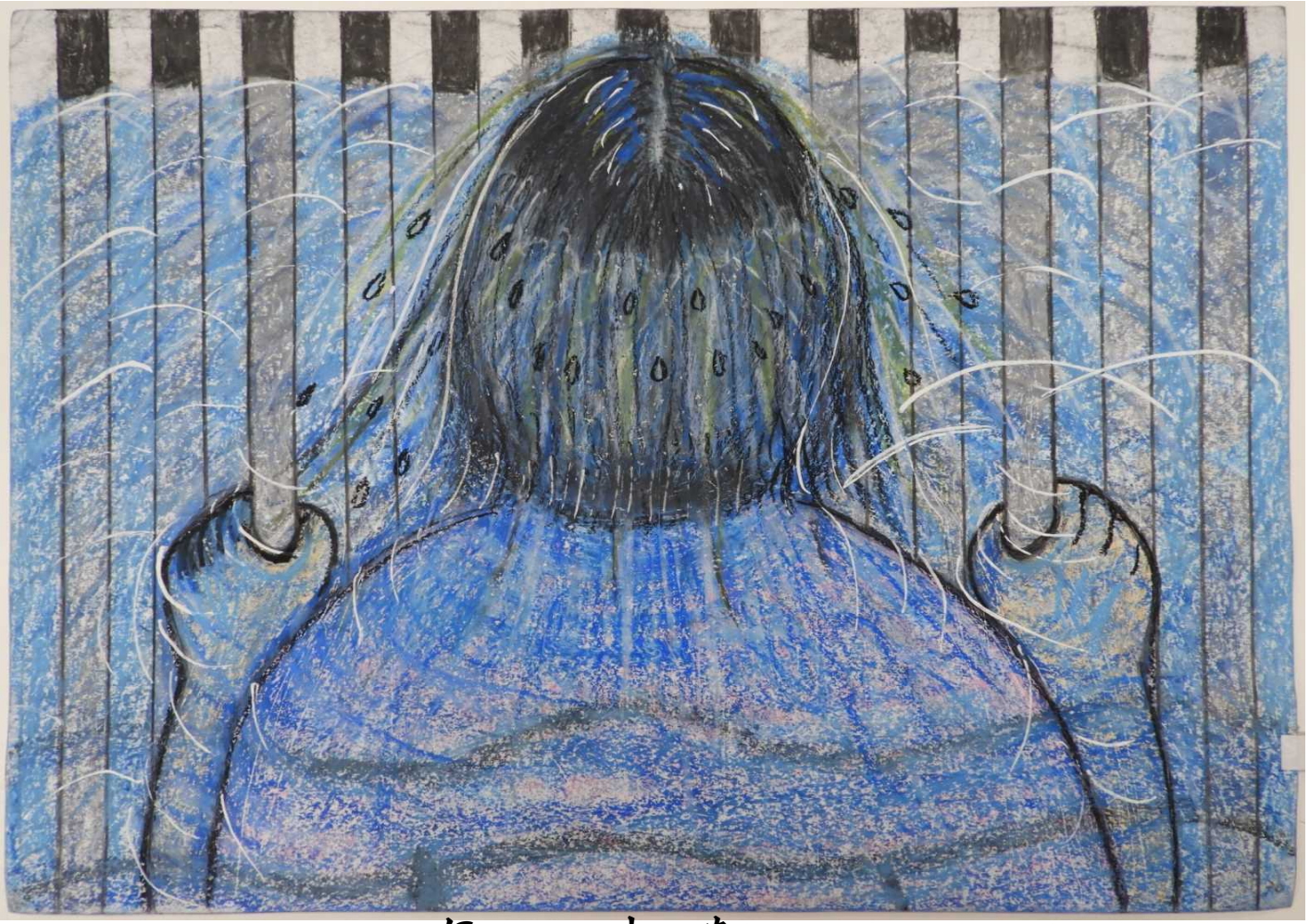
つかんだまま一緒に沈んでいきました。人生で一番むなしい経験をしました。

まだ手を左右に必死にもがきふたかきした時、左手甲に固い物が触ったのです。

直感しました。舗道のフェンスだ！足も着く！

助かった！よかった！

雨が降りしきる中、両手でギュッとフェンスを握りました。



ゆっくりと水平から出ました。自宅からここまで百メートル余りあります。

手の平を見るとむらさき色になっていました。

少し先にみかんの木が見えたので、更に増水してきたらこのみかんの木にすがろうと近づいて行きました。雨は激しく降っています。胸まで水につかり、とにかく寒い。

よく見ると、今一番私に必要な物がフェンスにへばりついてゆれています。

両手揃えてのれる１ｃｍ幅の木ワク。木ワクにのせる木切れ。傘がわりの発泡スチロールのフタ。浮き輪がわりのポリタンクを股にはさみました。

うす暗がりの周りをよく見ると、何という光景だろうか。

井関保育所の建物から激流がふき出し、畑や田んぼが県道も舗道も大きい河になって、フェンスの向う側の目の前を何台も何台も車がルームランプをつけ猛スピードで流れていきます。

目の不自由な楠本さんの横に止めていたパトカーも赤色灯をクルクル回しながら流れていきました。

その時、右の耳に旧道側の民家の2階から「助けてー！」の声が聞こえてきます。

左の耳には山の木が一本一本ズル・ズル・バシャン！ズル・ズル・バシャン！と那智川に落ちていく音が聞こえてきました。

突然左横腹に痛みを感じ、見ると大きく長いツルツルの丸太のもがれた枝の根本が横腹をこすって痛かったのです。どけようにも避けられない大きい丸太です。

右側はフェンスがあります。左側は何もありません。そして心配していた事が起きました。上流の舗道の方から無人の軽トラックがこちらに向って流れてくるのが見えたのです。体中固まり軽トラックの行き先を目を離さず見つづけました。車は近づき、私の目の前で丸太に添って下流に流れていきました。

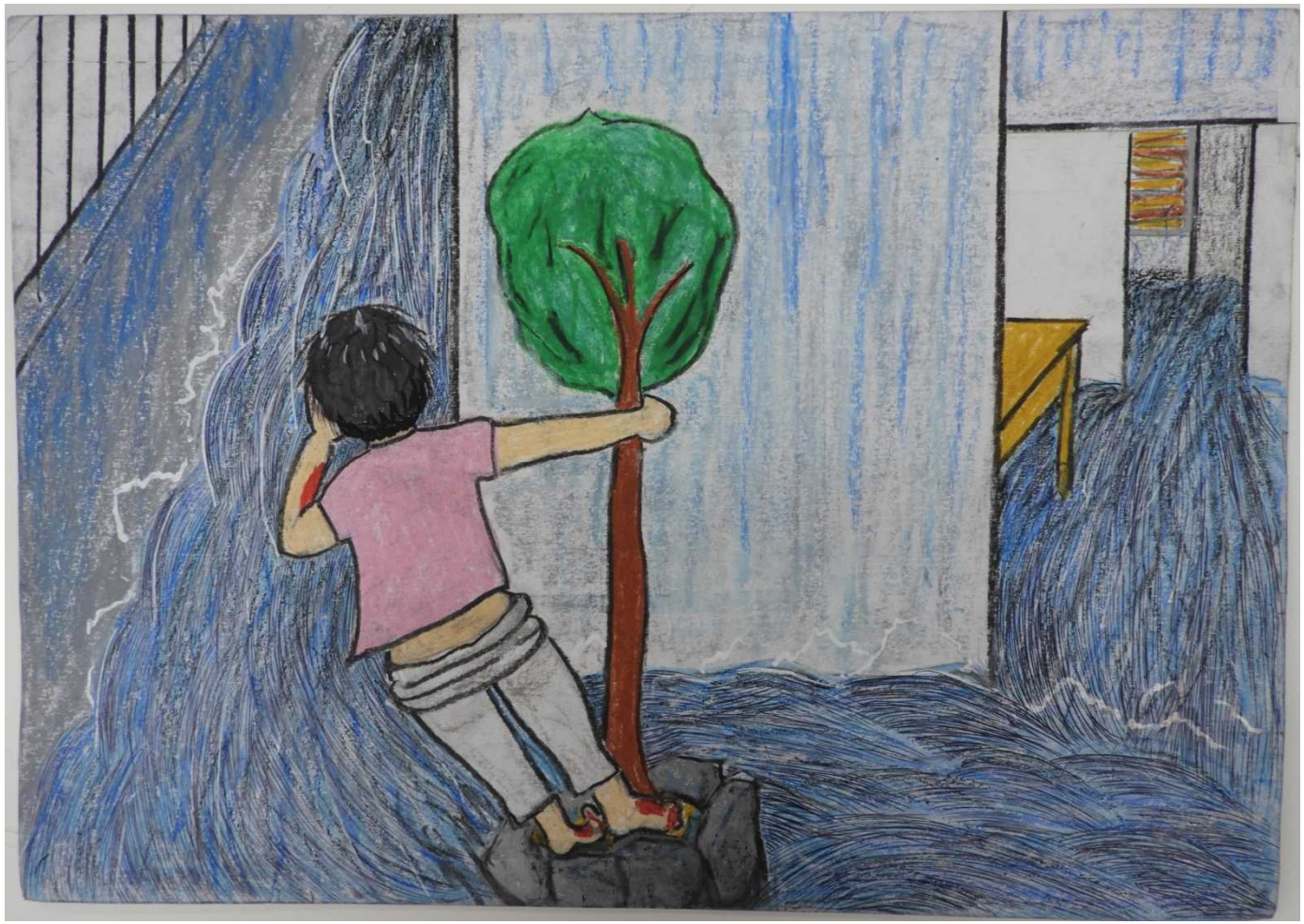
雨は降り続きます。激流のド真中でたった一人身体半分激流につかりながらフェンスを握りしめ、佇むしかない有りさまです。生き地獄とはこういう事なんだろうかと思いました。私は天に向って

「雨を止まして！娘とお父さんを助けて！」と叫ぶように祈りました。

何時頃なのだろう。雨が止み、夜がすっかり明けました。

私は一刻も早く我が家に行かねばと歩きました。途中の舗道にはガレキが積重なったり、流れ尽きた乗用車には幼児のぬいぐるみやオモチャがあり、この家族は無事だったんだろうかと思いながら、とにかく一刻も早く2人を探さなくてはと歩きました。

ヒザまでの水の高さでも流れが早く、ひっくり返りそうになり、大地に足を踏みつけるように必死で我が家を目指しました。



やっと三菱マテリアル事務所に着きました。事務所の奥の部屋から水がどんどん流れています。

隣の井関駐在所との間はものすごい勢いの流れで我が家へは行けず、事務所前の植木につかまり、身を乗り出すように我が家の屋根に登れているのでは、と名前を呼びましたが2人の姿はありませんでした。

その時突然、駐在所の2階の窓が開き、おまわりさんは私を見るなり「こっちへきたらアカン！」と叫んでいました。「わかっています！」と言っても水の音で聞こえないらしく、私は手で丸を作りやっとわかってもらいましたが、私はガックリしました。

駐在所の2階にも2人はたどり着くことができなかったのです。居れば窓から顔を出すはずです。

誰もいない三菱マテリアル事務所の中で机の上に腰かけながら、もう覚悟しなければならないのかと思うと悲しみがこみ上げ、泣きくずれました。

まだまだ生きる多くの人生があるのに娘がふびんでなりませんでした。

太陽がサンサンと昇り、真上をすごい音でヘリコプターが飛んでいます。

初めての2人の救援隊が2キロ先から徒歩でこられ、ケガをしている私に「救急車がありますので行きませんか。」と言ってくれたのですが、この場を離れたくないのでおことわりをし、泣きながら2人を待ち続けました。

しばらくすると井関駐在所の
おまわりさんが
「久保さん！娘さん無事だった
よ！」
「エッ！本当ですか！」
「どこで！」
「久保さんの屋根の上です。」
「エーッ！」
屋根を見た時には居なかった
のに？

すると救出された娘は駐在所の方からケガした様子もなくニコニコしながら小走りにくるではありませんか。

まさかこんなきびしい状況の中からよくぞ娘は生き抜いてくれました。こんなうれしいことはありませんでした！お父さんの最後の様子を話してくれました。

【娘の話】

娘の話は到底信じられない状況が起きていました。駐在所の2階を目指し、お父さんも娘も激流に飛び込んだが流され、私が吸い込まれたガレキに2人共つかまる事ができました。それもつかの間、ガレキの裏の広場の方から、大波のような洪水が来て、さっきぶら下がっていた自宅のトユに戻され、自宅とガレキの間を流されたり、戻されたりが3回も起き、3回目の時、明暗が分かれた。娘は水の勢いで波板に足がかかり、屋根の上の方に登ることができたのです。

お父さんは高い屋根の端に10本の指でぶら下がっていました。娘は何度も水を飲んでヘトヘトで助けに行けず「お父さん、こちらに上がって来れん？」と声をかけると「無理や！」という返事にガックリとなり、1秒か2秒後、頭を上げた時、そこにお父さんの姿はなかったのです。「お父さん！お父さん！」と叫んでも二度と姿を現さなかったのです。両親共亡くなってしまったのだろうか。屋根の上ずぶぬれになりながら家はギ・ギ・ギ、ガ・ガガーと音がし、私はどうなってしまうのだろう、不安と寒さでガタガタふるえ出した。

娘は「私一人でも生き抜こう」とガンバってくれたのです。時間が過ぎ、太陽がサンサンと昇り、はじめて道路を歩く人を見、拾って持っていたポリタンクで屋根をたたき、気づいてもらい、救出されたのでした。（以上が娘が話してくれた内容です。）

※夫は私が助かったことを知らないまま亡くなってしまいましたが高い屋根に登れ、助かった娘を見届けることができ、安堵していただろうとうと思います。それがせめてもの慰めです。

早目の避難をすれば、大切な命を亡くすことはなかったのです。私の体験紙芝居をどうか教訓にしていただきたいと思います。